

シドッチ評伝「密行」 仏・伊で翻訳

● 出版話題

キリスト教禁制の江戸時代、屋久島に上陸したイタリヤ人宣教師シヨバンニ・シドッチ（1668～1714年）の生涯を描いた「密行 最後の伴天連シドッチ」（古居智子著・2010年、新人物往来社）がイタリヤ語とフランス語に相次いで



増補版「密行 最後の伴天連シドッチ」（中央）とフランス語訳（左）、イタリア語訳（右）

古居さん（屋久島在住）増補版も

翻訳された。古居さんは「より多くの人に手にとってほしい」と話す。

シドッチは1708年、日本で布教が禁じられているのを知った上で単身、屋久島南部に上陸し、幕府に捕らわれた。引見した新井白石は、尋問を通してシドッチの博識に衝撃を受け「西洋紀聞」などを著した。2016年には東京・文京区の切支丹屋敷跡から出土した遺骨が、シドッチのものとして発表され、欧州でも話題になった。

シドッチ上陸地近くに住む古居さんは、同地でシドッチ研究に打ち込んでいたコンタリーニ神父（1921～98年）との出会いをきっかけに執筆を始めた。欧州での翻訳を受け、遺骨発見の項を加えた増補版（敬文舎・2592円）も出版している。

（兵頭昌岳）